

オオチャバネセセリとアサギマダラ

セミの声が騒々しい農家の縁先で眼下に広がる田んぼを眺めていると、オオチャバネセセリがやって来て左手の拳に止まった。

早い梅雨明けに続いて猛暑が続いているので農家の人々はイチモンジセセリの大発生を警戒している。

私はポケットからコンパクトデジカメを取り出して撮影体制に入る。虫めがねモードで1cmまでの接写が可能である。

オオチャバネセセリはまるで産卵をしているかのように尾端を皮膚にチョココンと付けては数歩あるき、再び尾端を皮膚に付けるという行動を続けている。



よく見ると産卵ではなくて、尾端から体液を出しているのがあった。



その体液を口吻で皮膚に塗りつけ、広げた後、口吻で吸飲しているのだった。汗が

乾いた後のミネラル分を摂取しているものと思い20枚撮影したが、動画で撮れたら面白かっただろうと残念な気もした。

体液を吸いつくすとまた数歩あるいて体液を分泌し、吸飲行動を続けるのだったが、そこで私はアサギマダラがヨツバヒヨドリやフジバカマ、スナビキソウなどの枯れた葉、茎、花などに口吻を伸ばしている姿を思い浮かべた。



佐藤英治さんの『アサギマダラ・海を渡る蝶の謎』(38 ページ)には、ハナイバナ、モンパノキなどの枯れ草、枯れ枝での吸汁行動や写真の記載も有る。

私は乾いた植物体からどうやってPAなどのアルカロイドやその他のミネラルを吸飲するのか、ずっと不思議に思っていた。今にして思うと、マーキング中に透明な体液が尾端から分泌されるのをたびたび体験し、目撃している。ある時は非常に毒性が強く、鼻水が止まらなくなったり、目が腫れあがったりの経験もある。

ひょっとすると撮りためたアサギマダラの写真の中に、体液を分泌している写真はないかと探してみたが、見つけることは出来なかった。そのつもりになって観察しないと見えないものかも知れない。



アサギマダラと同じタテハチョウ科のオオゴマダラでは、慣用名でパラベンと呼ばれる化学物質などに集まり、口吻から唾液を分泌して再び摂取する行動をとることが知られています。

また、藤野適宏さんからは、イチモンジセセリでは無くて、オオチャバネセセリだろうと指摘いただきました。インターネットのイチモンジセセリの画像サイトには両種が混在しているようです。

2011.8.14 追記

2011.08.12 ブログに記載

後日、BV アサギマダラの会の皆さんにお話ししたら、田口 誠さん(奈良先端科学技術大学院大学)から、次のような参考事例を教えてくださいました。やはり唾液かも知れません。というのは、オオチャバネセセリの口吻は伸ばすと体長ほども長いのに、アサギマダラの口吻はそう長くはありません。